

報徳役所書蔵普請から －蔵の普請と石材－

坂本 明 (宇都宮市文化財ボランティア協議会)

1. はじめに

日光市歴史民俗資料館・二宮尊徳記念館の敷地内に復元されている書蔵の外壁に使われているのが、徳次郎石研究会が現在調査中の「板橋石」です。

その説明文にはこう書かれています。「有形文化財（建造物）「報徳役所書蔵^注」市指定昭和40年3月、旧報徳役所（現報徳今市振興会館敷地）内にある。安政6年（1859）建造、木造石屋根石張2階建 間口2.5間 奥行2間 建坪10坪 当時経費73両 二宮尊徳が、嘉永6年（1853年）幕府より日光神領の復興を命ぜられ、安政2年に報徳役所60坪を建築した時、土蔵書庫3坪が狭小の為に拡張したのがこの書庫である。石材は、地元の板橋石で、同所の六左衛門が運搬した。大工、左官等延べ413人で建築した防火施設である。収蔵された15年間にわたる仕法記録1万巻は、戊辰戦争の時、福島県相馬に避難した。書庫は、明治5年以後点々とし、最後は栃木市の小江沼家に買い取られたが、小江沼家が市に寄贈、百年祭を機にここに復元した。平成9年3月日光市教育委員会」。



日光市歴史民俗資料館 書蔵（写真1）

注目したのが、経費が73両とはっきりした金額であることや、延413人で建築、石材は地元の「板橋石」で六左衛門が運搬したなど、解説の文章が具体的なことです。もしかすると「板橋石」だけではなく、江戸時代末期の蔵を普請した時のいろいろな資料があるのではないかと、そう期待して日光市歴史民俗資料館・二宮尊徳記念館を訪ねました。すると偶然にも、受付で対応してくれたのが令和4年6月26日に「板橋石」採掘場跡と一緒に調査した職員の齋藤康則さんでした。詳しく説明するまでもなく、齋藤さんが報徳役所書蔵普請に関する資料を用意してくれることになりました。

注) 文化財としては「書蔵」ではなく「書庫」になっている。

1週間後に受け取った資料は、『復刻版二宮尊徳全集第30巻』と『復刻版二宮尊徳全集第34巻』の報徳役所書蔵普請に関する箇所のコピーでした。二宮尊徳全集は二宮尊徳偉業宣揚会によって、昭和2年から7年にかけて刊行された二宮尊徳の思想と業績の全容をまとめたもので、原理、仕法、雛形、日記、書翰、仕法、雑輯、門人名著集の全36巻から構成されています。現在、県内の図書館などにあるものは、二宮尊徳百二十年祭記念事業の一環として昭和52年（1977）に龍溪書舎から刊行された復刻版です。

それだけではなく、齋藤氏は『復刻版二宮尊徳全集第34巻』の「雑輯（日記）安政6年」の報徳役所書蔵普請に関する部分を現代語に訳した『報徳役所内書蔵普請の様子』時系列一覧表も作成してくれました。

それらの資料に目を通すと、今まで不明であった江戸時代末期の石屋根や張り石の蔵の普請の様子や費用について、細かく追うことができる重要な資料であることがわかりました。以下は『復刻版二宮尊徳全集第30巻』と『復刻版二宮尊徳全集第34巻』の報徳役所書蔵普請に関する資料と、齋藤氏が作成した『報徳役所内書蔵普請の様子』時系列一覧表をもとに、当時の蔵の普請の様子と完成までの石関係の費用をまとめたものです。

2. 書蔵が造られた時代と背景

書蔵が普請された安政6年（1859）頃の世情はどうであったのか。ペリーが浦賀に来航したのが嘉永6年（1853）。安政2年（1855）安政の大地震。安政5年（1858）安政の大獄、日米修好通商条約に反対するものへ、大老井伊直弼による弾圧が始まる。安政7年（1860）には桜田門外の変で井伊直弼が害死。江戸幕府が開国に向けて動き出し日本が大きく変わろうとしていた時代でした。

小田原藩の地主の子供であった二宮尊徳は、小田原藩主の分家である下野国桜町領（現真岡市）再興を命じられ、文政6年（1823）桜町領に移り住み仕法を実践。その後、嘉永6年（1853）幕府より日光領復興事業を受命、安政元年（1854）に轟村復興に着手、安政2年（1855）に今市宿に報徳役所を移しましたが、惜しくも安政3年（1856年）に報徳役所にて亡くなりました。享年70歳。その後、事業は吉良八郎をはじめとする門人たちに引き継がれ、古くなった木造の書庫を壊して安政6年（1859）に造られたのが報徳役所書蔵です。

3. 書蔵普請の流れ

○『復刻版二宮尊徳全集第34巻』の「雑輯（日記）安政6年」

原文は、日付順に報徳役所の一日の様子を細かく日誌として書いたものです。その中の書蔵の普請に関する部分だけを齋藤さんが現代語に訳しましたが、解りやすいよう一部改変しました。

(日付はすべて旧暦)

- ・ 2月11日、材木の調達を瀬川村の豊之丞に依頼、内金として5両を支払う。
- ・ 2月20日、今市宿の大工小右衛門が書蔵の大工仕事を始める。
- ・ 3月1日、壁の材料の藁を轟村の吉左衛門から、同村五郎左衛門からは竹を買い上げ、金2朱と銭300文を支払う。(土壁の芯材)
- ・ 3月5日、千本木村の與(与)兵衛から書蔵普請用の細木16本、杭木8本を買い上げ、金3朱と銭42文を支払う。宇都宮材木町火野家(日野屋)栄助が宇都宮大工町壁方久五郎を連れてきて逗留する。
- ・ 3月7日、森友村年寄子之助他2名、藁2駄を持ってきたので400文を支払う。
- ・ 3月9日、書蔵の石について請け負った今市宿石屋豊之助に内金1両2分2朱支払う。
- ・ 3月10日、瀬尾村高百坪、藤三郎に壁土代銭1貫608文を支払う。
- ・ 3月13日、書蔵の建前(上棟式)を無事終了。
- ・ 3月14日、破畑(専門の土木作業職)の留松に仕法普請と書蔵普請の費用を通い帳に記載して渡した。
- ・ 3月15日、今市宿鍛冶屋亀吉(安沢屋)に書蔵鉄物の代金を払う。(金額不明)
- ・ 3月21日、宇都宮大工町壁方久五郎が朝宇都宮に戻る。
- ・ 3月22日、板橋宿(下板橋)の六左衛門が石材を持ってきたので内金1両を支払う。
- ・ 4月5日、田中村(徳次郎宿)石屋彦右衛門倅が石を半分ほど運んできたので、残りも遅延することなく運ぶことを約束して金3両を支払う。今市宿石屋豊之助が石輸送を終了したので内金1分を支払う。
- ・ 4月14日、田中村(徳次郎宿)石屋彦右衛門に石材の内金3両を支払う。今市宿鍛冶屋亀吉に釘代金を支払う。(金額不明)
- ・ 5月6日、板橋宿(下板橋)の六左衛門に石運送の内金3分を支払う。大工小右衛門に釘代と大工日雇の残金を支払う。(金額不明)
- ・ 6月10日、瀬尾村高百坪、藤三郎に壁土代を支払う。(金額不明)
- ・ 7月1日、今市宿左官駿河屋甚兵衛に内金1分を支払う。
- ・ 7月2日、今市宿左官駿河屋甚兵衛に内金1分を支払う。
- ・ 7月20日、今市宿左官駿河屋甚兵衛に内金2朱を支払う。
- ・ 7月29日、今市宿の大工小右衛門に内金2両を支払う。
- ・ 8月19日、板橋宿(下板橋)の石屋六左衛門の使いの者が土蔵に張る石を運んできたので、早速石工が仕付ける。納品が終了したので清算をしたところ不足があったので支払う。(金額不明)
- ・ 8月28日、大工小右衛門並びに常吉に日当分相当を支払う。
- ・ 9月4日、石屋職人2人のうちの源蔵が仕事を終了し報徳役所を朝出立した。
- ・ 9月5日、石屋職人の仙次郎が仕事を終了し報徳役所を夕出立した。
- ・ 9月9日、宇都宮の左官は昨日まで仕事をして今朝いったん宇都宮に帰ったが、又ほどなく戻ってくるはずだ。
- ・ 9月16日、宇都宮の左官2人は昨夜戻り、今朝から仕事を始めた。
- ・ 9月18日、宇都宮の左官久五郎の親が病死したと夕方飛脚が知らせに来て宇都宮に戻る。賃金2分を支払う。
- ・ 9月22日、宇都宮の左官久五郎が連れてきて働いていた職人が、昨夜、役所内の僕夫部屋から諸品を持ち逃げしたので、朝に書状で左官久五郎に知らせた。
- ・ 10月1日、今市宿左官駿河屋甚兵衛にこれまでの手間賃の残りを勘定し、支払う。
- ・ 11月6日、書蔵の普請が終了したので書蔵関係の帳面すべてを入れ替えた。

大工仕事は、安政6年(1859)2月11日に材木の調達を瀬川村の豊之丞に依頼してから、たった10日で今市宿の大工小右衛門が書蔵の大工仕事を始めました。大きな普請ではないので、杣師の豊之丞は手持ちの充分に乾燥した中から材木を選んだと考えます。そして材木の調達から1ヵ月後の3月13日には上棟式を行っています。8月28日に「大工小右衛門並びに常吉に日当分相当を支払う」と書いてありますので、大工は小右衛門だけではなく、常吉という大工もいました。書蔵が完成するまでは約9ヶ月です。

土壁と張り石の漆喰目地仕上げは今市宿左官駿河屋甚兵衛が請け負いました。7月1日・2日・20日に内

金を支払っていますので、駿河屋甚兵衛が請け負ったことは間違いありません。ここに宇都宮材木町火野屋（日野屋）栄助が連れてきた壁方職人が絡んできます。左官仕事のなかでも、外壁の漆喰仕上げは技術的に難しいので、3月5日に報徳役所に入出入りする宇都宮の町人火野屋が、わざわざ腕の良い久五郎という職人を連れてきたことが書かれています。しかし、9月18日に親の死で久五郎が宇都宮に戻ると、9月22日には、久五郎が連れてきたもう一人の職人が下男部屋から物を盗んで失跡するなど、普請の苦勞を読み取ることができます。

石に関しては、少々複雑です。「8月19日に板橋宿の石屋六左衛門の使いの者が土蔵に張る石を運んできたので、早速石工が仕付ける。納品が終了したので清算をしたところ不足があったので支払う」とありますので、張り石の加工は板橋宿石屋六左衛門であると判断できますが、石屋根については今市宿石屋豊之助と田中村石屋彦右衛門の、どちらが加工したのかがはっきりしません。4月5日に、両方に石代金を支払っているからです。しかし、田中村石屋彦右衛門に支払った金額は4月5日に内金3両、4月14日に3両の計6両支払っているのに対し、今市宿石屋豊之助には3月9日に内金1両2分2朱、4月5日に1分の計1両3分2朱しか払っていません。石屋根の枚数からの支払額を考えると、加工したのは田中村石屋彦右衛門であると判断しました。

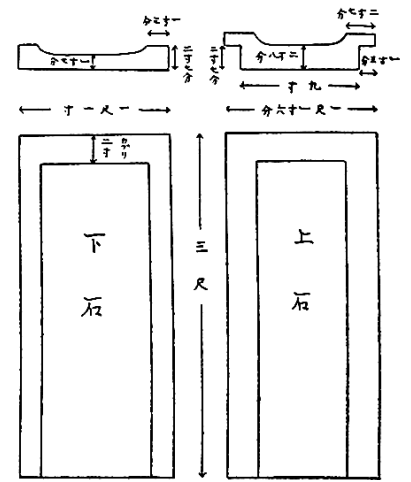
では、今市宿石屋豊之助はどのような仕事をしたのでしょうか。まず、土台となる石工事をしたと考えます。理由は、「3月9日、書蔵の石について請け負った今市宿石屋豊之助に内金1両2分2朱支払う」とあり、3月13日の書蔵の建前（上棟式）の前です。基礎の石積みが終了しなければ、建前はできません。その後は推測ですが、いずれも気心の知れた地元今市宿の大工小右衛門、左官駿河屋甚兵衛と工程を調整しながら、雇人の源蔵と仙次郎を使い、張り石の取り付けや石屋根を葺くなどの石工事全般を取り仕切ったと考えます。

私が重要視しているのは、石屋根を加工した場所です。復元された書蔵の説明文には「石材は、地元の板橋石で」と書いてあります。しかし「雑輯（日記）安政6年」には板橋宿の六左衛門も田中村の彦右衛門も、石を運んだとしか書いてありません。普通に考えれば、張り石は下板橋の石切り場、石屋根は田中村の石切り場から切り出され、切り出された場所で加工し運搬したはずですが、説明文どおりだとすると、田中村彦右衛門親子は田中村の石切り場ではなく、下板橋の石切り場に出向き石屋根に加工したことになります。

幸いなことに建築当時の石屋根の一部が復元した書蔵内に保存されていますので、板橋石と田中村の徳次郎石のどちらの石なのか、今後の石屋根の岩質調査に期待します。

その他として、あまり知られていませんが、石屋根が地震の揺れなどで落下しないようにするために、削り残しのコブを設けて母屋に引っ掛けるようにしています。（図1）

今回、写真撮影時に発見したのですが、石屋根の固定に和釘が使われていました。但し、後年になって修繕した際に和釘が使用された可能性も考えられます。（写真2、写真3）



参考図 石屋根の寸法
月刊『工藝』昭和11年（1936）より転載

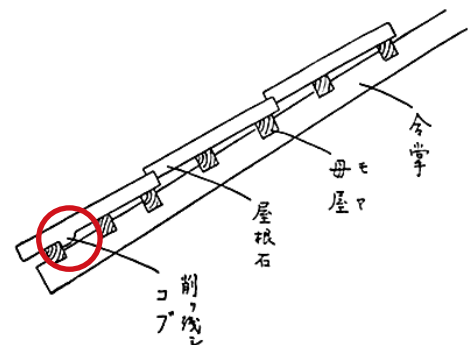


図1 月刊『工藝』昭和11年（1936）より転載



復元された書蔵内に保存されている石屋根の上石
固定には和釘が使用されている（写真2）



上石の裏側 和釘だとはっきり判る
釘先を曲げてあるのは解体後と思われる（写真3）

4. 石の値段や手間賃からわかること

○『復刻版二宮尊徳全集第30巻』の「書蔵普請諸色入用取調帳」から抜粋

安政6年の12月に費用の明細を帳面にしたためたものが原文で、書蔵普請の材木や板材・各種石材・壁材・鍛冶金物・職人手間などの単価や合計が示されており、最後に総工費として、「合金七拾貳兩三分貳朱永九拾文三分（72兩3分2朱永90文3分）」と書かれています。そこで、特に使用された石材にスポットを当て、土台石や張り石、石屋根などの石関係を解りやすいように項目別に分けて抜き書きし、石材から石工の流れと石材の単価を割り出しました。

基礎関係

- ・大石40 代銭2貫664文 但一つにつき銭64文
- ・小石25盃 代銭1貫664文 但一盃につき銭64文
- ・砂利57盃 代銭2貫848文 但一盃につき銭48文
メ銭7貫108文
- 爲金^{注)}1兩永72文1分 但銭直6貫700文
- (基礎の合計金額) 注) 爲金とは合計金額のこと。

土台石と内扉・外扉周り関係

- ・土台石8間3尺 代銀51匁 但巾1尺2寸 1間につき銀6匁
- ・二重石8間3尺 代銀68匁 但巾1尺1寸 1間につき銀8匁5分
- ・大坂戸前石長1丈5寸 代金2分2朱銭1貫324文
- ・戸前石4尺 代金2分
- ・大坂持せ石3本 代金2朱銭500文 但長2尺
- ・土台石据人足2人 代銭704文
- 二重石人足8人 代金1分銭1貫131文
- ・運送人足37人 此賃金1兩2分2朱銭300文
メ金3兩2朱
銀119匁
銭3貫959文
- 爲金5兩2分2朱 但銭直6貫700文永74文6分 但両銭6貫700文
- (土台石と内扉・外扉周りの合計金額)

石屋根・張り石・敷石関係

- ・屋根石^{注)}120枚 代銀444匁 但長3尺 1枚に付銀3匁7分
- ・箱蓋石14枚 代銀51匁8分 但右同断(長3尺)
- ・軒石40枚 代銀12匁 但長1枚に付銀3分
- ・建石63枚 代銀100匁8分 但長3尺巾1尺 1枚に付1匁6分
- ・角石^{すみいし}4枚 代銀24匁 但長4尺 1枚に付6匁
- ・がつしやふ石12枚 代銀20匁4分 但長1枚に付1匁4分
- ・戸前石3本 代銀36匁 但長5尺8寸巾9寸見付5寸 1本に付12匁
- ・1尺長石1枚 代銀2匁
- ・小石2つ 代銭100文
- ・石 代銀4匁 但損じ有之追って増し分
- ・石屋手間27人5分 賃金1兩1分2朱 但1人付銀3匁
メ金1兩1分2朱
銀695匁
銭100文
- 爲金12兩3分2朱永98文3分 但銭直6貫700文
- (屋根石・張り石の合計金額)

注)「書蔵普請諸色入用取調帳」では屋根石と書かれていますが本文では現在一般的な石屋根で統一しました。

江戸時代の貨幣換算は少々複雑です。安政6年（1859）頃の金・銀・銭の相場を調べると、おおよそ1両＝銀60匁＝銭6千500文（銭1貫は千文）になります。では、江戸時代の1両は現在の貨幣価値に直すといくらになるのか。通常は米価で換算していますが、あえて庶民的な「かけそば」の値段、それも立ち食い蕎麦の「かけそば」の値段で割り出しました。令和4年の立ち食い蕎麦の「かけそば」の値段は、だいたい¥350円前後です。『図説日本貨幣史』『新修近世賃金物価史料』などを参考に安政年間のかけそばの値段を調べてみますと、一杯16文になります。すると、1文は¥22円に相当します。

この方法で現在の円に当てはめると、1両は¥14万3千円、2分金が¥7万1千500円、1分金と1分銀が¥3万5千750円、2朱金が¥1万7千875円、1朱銀が¥8千938円、そして銀1匁は¥2千383円、銀1分は¥238円になります。少々乱暴な計算ですがこれを金額の目安とします。

「書蔵普請諸色入用取調帳」では土台石や二重石、大坂戸前石など、石材の部材名がはっきりと書かれていますので、どのように石関係の工事が進んでいったのかが解ります。私は今から30年ほど前、知り合いの大谷石の職人から石積みを習い、基礎の穴を掘ることから始め、自力で大谷石を加工して積み、すべて手造りの10㎡の工房を建築しました。（写真4）

そこで、大谷石職人の指導と自分の経験を踏まえ、「書蔵普請諸色入用取調帳」からどのように石工事を進め、石材が現在の金額ではいくら位になるのかを調べてみました。



写真4 完成直後の自作工房

基礎関係

工事は最初に蔵の基礎になる2間半×2間より少し大きめにぐると穴を掘ります。そこに、「大石」40個、「小石」25盃、「砂利」57盃を均等に平に敷き詰め、通称「タコ」と呼ぶ地固め器で突き固めていきます。現在のコンクリートの布基礎工事と同じです。（図2）

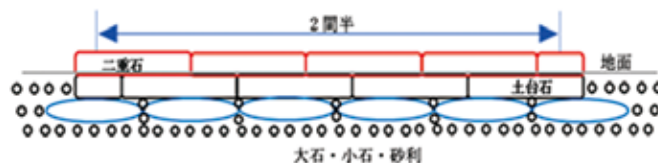


図2 基礎部分の側面図

土台石と内扉・外扉周り関係

次に、「土台石」を「追い回し^注」で平置きに並べていきます。（図3）ここで重要なのは、すべての石を同じ高さの水平に並べることです。合計18本です。「土台石」1本の長さは3尺より1寸7分ほど短い85.85cmで、2間×2間半がだいたい石の中央になる仕上がりです。次にその上に「二重石」を同じように「追い回し」で積みます。（図4）

注）追い回しとは石の並べ方で、石目が揃わないように積む大谷石の基本の積み方。

「二重石」とは基礎の二段目の意味です。基礎部分は大石と石積み2段の都合3段になりますが、地表から見えるのは「二重石」だけです。

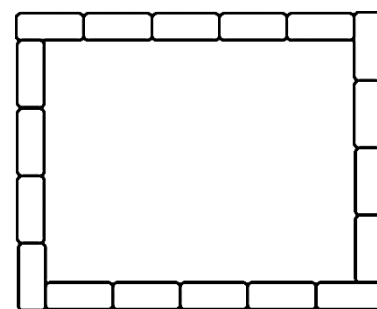


図3 土台石1段目追い回し

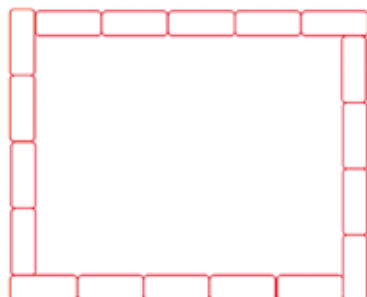


図4 二重石の二段目追い回し

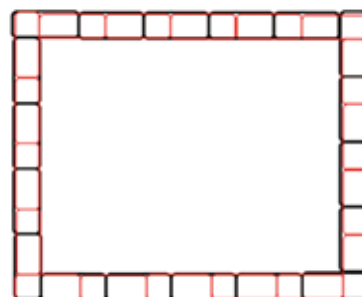


図5 土台石と二重石の石目が1/3ずれる

並べ方ですが、「土台石」と「二重石」の「石目」が絶対に揃わないように積みます。（図5）

基礎の「土台石」と「二重石」の役目は、全体に加重を分散させるためと、多少建物全体が沈下しても、建物が傾かないよう水平を保つ役目です。それだけではなく、骨組みとなる木材を守り、地中の湿気を防ぐ役目

もあります。(図2)

「土台石」と「二重石」の幅と値段の違いは、「二重石」は外側が地上で見えるので石質の良いもの、そして表面を丁寧に加工する手間賃が加わったものです。

「土台石」は1間につき銀6匁で18本。1本の値段は銀2.83匁。「二重石」1本の値段は同じく18本で1間につき銀8匁5分。1本の値段は銀4.01匁。現在の値段に換算すると土台石の単価は¥6千744円、二重石の単価は¥9千561円です。

「大坂戸」とは木製の戸に防火のための漆喰を塗った引き込み戸のことです。敷居となる「戸前石」は「大坂戸」が重いですから戸車により溝が摩耗しないように、硬い安山岩を使用しています。同じ理由で、「大坂持せ石」も硬い安山岩を使用しています。(写真5)

火山岩である安山岩は、稲荷川や大谷川の河原にある石を加工したもので、大きな石は稲荷川上流やその周辺で掘り出されたものです。日光東照宮の寛永の大造替の基礎や神橋の橋脚にも使用された石で、今市宿では追分地蔵尊が有名です。今市宿石屋豊之助はおもに硬い安山岩を扱っていたと思われます。



写真5 戸前の安山岩

だいそうたい

石屋根・張り石・敷石関係

屋根に用いられた石は120枚。1枚、銀3匁7分です。復元された石屋根の枚数を数えると114枚ですので、修繕用の予備が6枚と考えます。現在の値段に換算すると1枚¥8千817円です。「上石」と「下石」の値段は同じです。

「箱蓋石」は瓦屋根の棟瓦(冠瓦)にあたるものです。箱状に造り、屋根の峰の部分にかぶせて雨水の侵入を防ぐ重要な部材です。(写真6)

問題なのが「軒石」の40枚です。「軒石」とはなにか、文献を調べても解りませんでした。そこで大谷石に造詣が深い、株式会社テイクス設計事務所の武井貴志さんに聞いてみました。推測であると前置きした彼の話では、「防火を考え、今のように直接屋根を葺くのではなく、昔は置屋根といって、蔵本体の屋根(天井)の上に壁土をのせ、その上にまた屋根の骨組みをのせて石屋根にした。その天井に壁土を載せる場合に壁土が崩れ落ちないようにするために軒周りに石を置いたのではないか」。実際に彼が宇都宮の下ヶ橋で石蔵を調査した時に、軒周りに石を置いた置屋根があったと話してくれました。復元された報徳役所書蔵も置屋根です。間違いありません。(図6)

「軒石」は40枚です。1枚につき銀3分ですので、現在の値段に換算すると¥714円です。となると1枚の長さや巾はそんなに大きくないと思いますので、建物は2間半×2間の大きさですから、一周分の枚数を考えると、40枚は納得できます。

「建石」は枚数を数えてすぐに解りました。外壁に張られた石です。1枚1匁6分、現在の値段に換算すると¥3千813円です。

「角石」4枚、長4尺1枚に付銀6匁。現在の値段に換算すると¥1万4千298円。3尺の「建石」を外壁に縦と横に効率よく石釘で固定しても、どうしても四隅には規格外の4尺の長さの張り石が必要になります。江戸時代でも、規格外の石は石切り場からの切り出しの手間賃も高くなり、この値段になったのでしょう。

「がつしやふ石」12枚、1枚に付1匁4分、現在の値段に換算すると¥3千336円の「がつしやふ石」とはなにか、「書蔵普請諸色入用取調帳」に書かれた順番からすると、石屋根に関係する石ではないようです。置屋根だとすると、石屋根の骨組みの材木を支えるため、蔵本体の屋根の棟に軒石と同じように棟の左右に合掌するように並べた石と考えます。(図6)



写真6 箱蓋石 (参考)

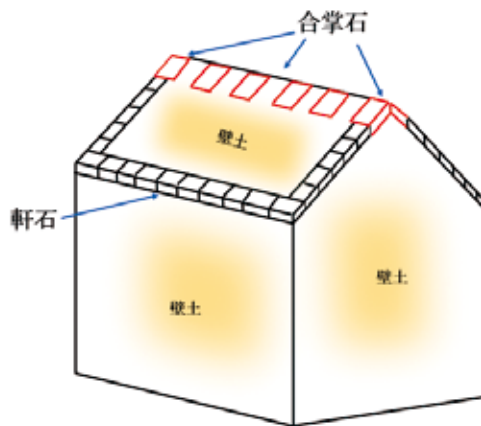


図6 蔵本体に使われた軒石と合掌石

「1尺長石1枚 代銀2匁1」ですが、石の巾が1尺の長尺の敷石と解釈しました。「小石2つ」は底を支える柱の束石です。

「書蔵普請諸色入用取調帳」の石関係のその他としては、張り石を固定するための石釘があります。調べてみると「石釘百本 代銭壹貫九百貳拾文」とありました。本数は100本、値段は1本あたり19文です。現在の値段に換算すると¥422円です。

石釘を別として、石関係ではだいたい総額18両5分4朱になります。直接の石屋根の支払いが銀495匁8分で両に直すと8.2両、張り石の支払いが122匁8分で、両に直すと2.05両になります。石屋根と張り石の合計で10.25両となります。書蔵普請諸色入用取調帳の最後に書かれている「合金」つまり総工費は72両3分2朱永92文3分。現在の値段に換算すると、およそ1千万円。総工費の約7分の1が石屋根と張り石の費用でした。

5. おわりに

『復刻版二宮尊徳全集第30巻』の「書蔵普請諸色入用取調帳」と『復刻版二宮尊徳全集第34巻』の「雑輯（日記）安政6年」から読み取れることは、部材の張り石や石屋根を加工した職人と、実際に書蔵に取り付け作業を行った職人は別であること。そして、石屋根は田中村（徳次郎宿）、張り石は下板橋（板橋宿）の違う場所の職人によって加工されたことです。このことから、石屋根と張り石は現在の建築資材と同じように、規格品として成立していたと考えられます。言い方を変えるなら、今市宿の大工も左官も石屋も、最初から石屋根と張り石などの規格品が流通していることを知っていて仕事を始めていたわけです。

他の事例としては、宇都宮市指定有形文化財で、昭和28年（1953）まで石屋根であった、宇都宮市泉町の延命院の地蔵堂があります。享保年間（1716～1735）に芳賀郡田野辺村（現市貝町）の宮大工、長野万右衛門が造ったという記録が残っています。（写真7、写真8）

もし、報徳役所書蔵と同じ手法で延命院の地蔵堂が建造されたのであれば、書庫の普請から100年以上前の享保年間には石屋根は規格品の建築資材として流通していたことになります。というのもこの延命地蔵堂の屋根の形状が、石屋根の重量に耐えられるように、上部が切妻、下部が方形の特殊な2段構造の屋根の形状をしているからです。また、基礎は内部の束石の基礎を別として、柱の立つ外周部は報徳書蔵と同じように大谷石の「追い回し」の二段積みの基礎です。（写真9）

私の主張は少々飛躍しすぎているかも知れませんが、栃木県中央部では、少なくとも18世紀初頭には、豊富な資源としての耐火性に優れていて、コスト的にも廉価な凝灰岩を利用した瓦屋根の代わりに石屋根や、平瓦を利用した海鼠壁の代わりに張り石が規格品として流通していたのではないかと。そして、石屋根や張り石は輸送の手間やコストを抑えるため、採掘や加工の技術を持った職人もしくは職人集団が、蔵などを建てようとする近くの小規模の石切り場に出向き採掘し、石屋根や張り石に加工していたのではないかと。その職人集団の中心地となったのが、周辺に石切り場も多く、現在も張り石や石屋根の建造物が多く残っていて交通の便も良く、東照宮のある日光にも近い徳次郎宿だと考えます。報徳役所書蔵普請の記録はそれらを証明している貴重な資料に思えます。

最後に『復刻版二宮尊徳全集第30巻』の「書蔵普請諸色入用取調帳」と『復刻版二宮尊徳全集第34巻』の「雑輯（日記）安政6年」の存在をご教示いただいた他に、『報徳役所内書蔵普請の様子』時系列一覧表を作成して下さった齋藤康則さんと、貴重なアドバイスをくださった武井貴志さんに感謝いたします。



写真7 現在の延命院地蔵堂



写真8 元治元年（1864）に菊池愛山によって描かれた延命院地蔵堂絵馬（部分）



写真9 延命院地蔵堂の大谷石の基礎

参考文献

- 『月刊工藝65号』 日本民芸協会 1936年
- 『時代考証辞典』 稲垣史生著 株式会社新人物往来 1973年
- 『復刻版二宮尊徳全集第30巻』 龍溪書舎 1977年
- 『復刻版二宮尊徳全集第34巻』 龍溪書舎 1977年
- 『図説日本貨幣史 田辺秀雄著復刻版』 日本学術協会編 1991年
- 『小貝川ゆくて遙かに：市貝の風土と歴史』 市貝町教育委員会編 1998年
- 『民藝6月号 第630号』 日本民芸協会 2005年
- 『栃木県歴史の道調査報告書第一集』 栃木県教育委員会 2008年
- 『新修近世賃金物価史料』 小柳津信郎 成工出版部 2018年
- 『東京都東久留米市柳窪地区に残る武蔵野の景観Ⅱ－土蔵の形式と特徴について－』
鈴木賢次 日本女子大学紀要 家政学部 第57号 2010年
- 『江戸・東京の土蔵の変遷に関する研究』 森下雄治 歴史都市防災論文集 Vol.14
立命館大学 歴史都市防災研究所 2020年
- 『報徳役所内書蔵普請の様子』 時系列一覧表 齋藤康則氏作成 2022年
- 『日光の石文化』 国土交通省関東地方整備局日光砂防事務所制作ホームページ
https://www.ktr.mlit.go.jp/nikko/nikko_index012.html